

巻 頭 言

2011年3月11日金曜日。私たちはテレビから次々と繰り出される映像を前に茫然としていました。街が海にのまれ、街がまるごと姿を消しました。

土の上を歩かなくなると何年になるでしょうか？ 街路樹や植栽はオフィス備品のように種類とサイズが統一されています。そのオフィスもまた照明も温度も湿度も騒音も一定の基準に保たれており、交通機関はスケジュール通りに運行し、電気も水もガスも食糧もサイン一つで供給されるのが当たり前です。その日、管理された環境、当たり前の便利さの脆さに気づかされました。

しかし、舗装された道路や一定の室温は、車いすの方や体温調節の難しい方には欠かせず、サービスへのアクセスの容易さは障害者にとって不可欠な仕組みでもあります。私たちの仕事の一つは、有形・無形のバリアーを取り除くことなのです。その日、不自由な方々を助けにむかい、ともに海にのまれた方々のニュースには絶句するしかありませんでした。

「私たちは、豊かな人間性と高い専門性を培い、地域で自分らしく生きることのできるリハビリテーションを推進し、全ての人に分け隔てなく暮すことのできる社会の実現をめざします。」これは、私たちリハビリテーション事業団の経営理念であります。

普段何気なく使っている言葉、「地域」や「自分らしく」「分け隔てなく暮す」などについて、あの日以来、職員一人ひとりがその意味を問い直したにちがいありません。

私たちが直接的・間接的に提供するサービスや専門的技術の開発は、すべてこの経営理念に根差したものであります。研究紀要の発刊はそのことをあらためて俯瞰するよい機会となり、また、多くの方々にご批判いただけるよう、websiteでの閲覧についても整備を進めております。

来年度、事業団は創立25周年を迎えます。私たちの仕事が人間性に対する洞察に富んだものとなるよう、これからも惜しまず汗を流してまいりたいと思います。

横浜市総合リハビリテーションセンター

センター長 小池純子